

薩摩の郷中教育とボーイスカウト

県ボーアスカウト連合理事 西 昌平
(元医師会病院事務部参事)

1. 薩摩の郷中教育の概略

薩摩の郷中教育は武士階級の男子を対象に、年長者が年下を訓育するという形態の教育法で、方限や麓といった各郷を単位に学習団体を編成して、施設や特定の教師も無く青少年達自身が自発的・継続的に小さな団体で人間育成・人格形成を目的とした学習活動が行われました。

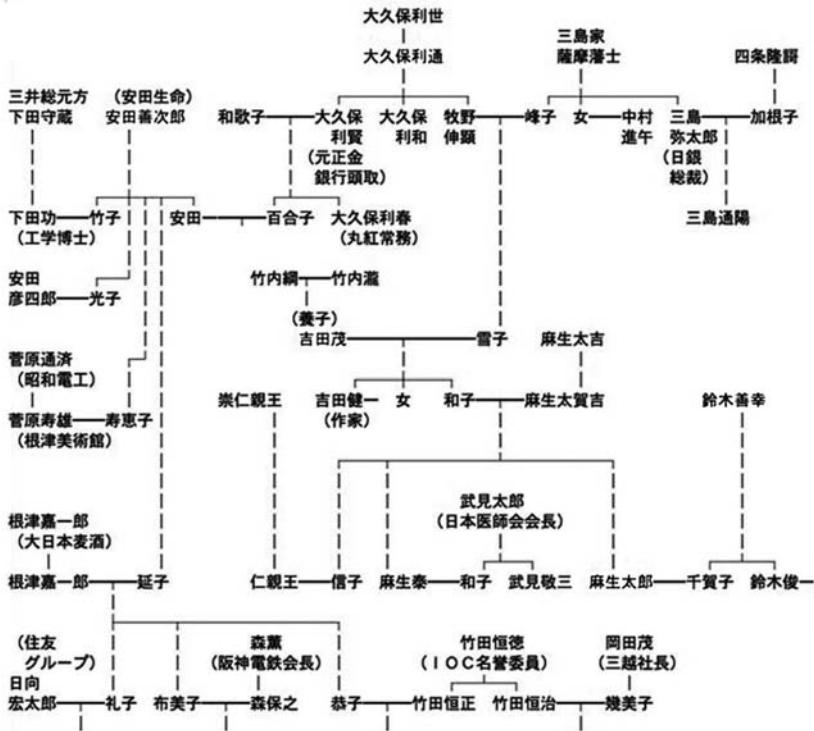
今から430年ほど前、10年にも及ぶ朝鮮出兵で薩摩では成人男性が減少し、年寄りと少年少女そして成人女性という社会構成になり、風紀の乱れや精神の弱体化を招きます。これを憂いた留守居役の新納忠元が島津日新公の教えを基本として興した教育制度が郷中教育

の始まりとされています。

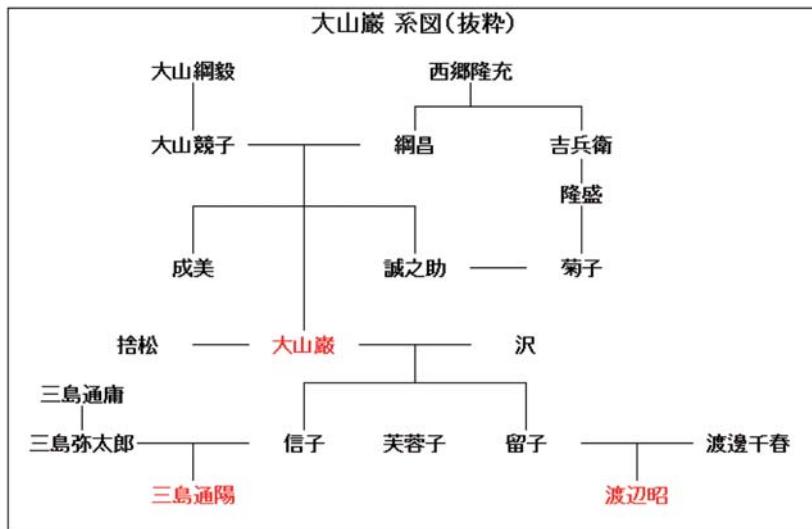
2. ボーイスカウト運動と郷中教育の類似点

前述した郷中教育の「青少年達自身が自発的・継続的に小さな団体で人間育成・人格形成を目的とした」はまさにボーイスカウト運動の理念・教育法と同じです。また、設立の背景も類似しています。ボーイスカウトの創始者ベーデン・パウエルがこの運動を考案した時代のイギリスも郷中教育が始まった時代と同じく、長く続いたボア戦争の影響もあり怠惰な風潮が蔓延していた時代でした。

国将来を担う青少年の健全育成の必要性を感じたベーデン・パウエルは青少年の特質



大久保利通の系図



を活かした教育法を創案して1907年に実験キャンプを実施します。

このキャンプの成功を基に翌年1908年に発行した「Scouting For Boys」によってボーイスカウトの活動が広く青少年に受け入れられ、彼が提唱する野外での活動やパトローリングといった青少年教育法が世界に伝播して行くことになります。

3. 鹿児島とボーアイスカウト運動との縁

ボイスクアウト運動の情報を得た当時の文部大臣牧野伸顕（大久保利通の次男）は1908年にベルギー大使の秋月左都夫に調査を命じ、広島高等師範を中心に研究が進められます。1910年にイギリスから帰還した文部省督学官蒲生保郷の桂首相への建白によって1911年には活動が本格化します。

また、当時学習院の院長であった乃木希典もこの運動に感銘して学習院でボーイスカウトの教育法に習ってキャンプなどの野外活動を行っています。この乃木希典から薰陶を受けたのが、第4代総長の三島通陽でした。

三島通陽の祖父は西郷・大久保から見出された三島通庸。通陽は大山巖の娘信子と通庸の子で初代日銀総裁の三島弥太郎の子で大

山 巖の孫ということになります。

第5代総長の渡邊 昭は同じく大山の娘留子と渡邊千春の子で通陽とは従兄弟になります。

大山 巖は西郷隆盛の従兄弟にあたり、孫の三島が乃木希典の薰陶を得てボーイスカウト運動を推進しました。そのボーイスカウト運動は大久保利通の次男牧野伸顕によって日本にもたらされたものでした。我々鹿児島のスカウト運動に関わる者は鹿児島とボーイスカウト運動とのただならぬ縁のようなものを感じずにはいられません。

4. ボーイスカウト運動は郷中教育を参考にしているのか

以前から鹿児島の郷中教育関連の話や観光案内にボイスカウトは郷中教育を参考に作られたと紹介されることがあります。

これは、1911(明治44)年6月イギリス国王ジョージ五世の戴冠式に明治天皇・昭憲皇太后的御名代として派遣された東伏見宮御夫妻に随行した陸軍大将の乃木希典が、戴冠式のあとロンドン・ハイドパーク広場でボーカル・カウトの訓練を見学します。そこで、乃木大将はベーデン・パウエルに「こんな素晴らしい」

い組織を如何にして創られましたか」と尋ねました。パウエルは、「この制度は、薩摩の郷中教育を調べ良い点を斟酌して組織したものです。」と応えたということです。

この逸話は、軍人ベーデン・パウエルが極東の小国日本のそのまた南端の薩摩がイギリス海軍と戦い、それを撃退したこと興味を持ち、その薩摩の青少年育成法を参考にしたのではないかという想像補足まで生まれています。

この、ロンドン・ハイドパークでの出来事は鹿児島市長であった上野 篤が著書「健児の社」に右記のように著しています。

5. 郷中教育以降の青少年教育

明治になって尋常小学校が作られ、郷中教育は近代の教育システムに移行して行く一方、郷中教育の延長と言える「(学)舎」が組織されます。

そのような中、後藤新平初代総長のもと、関東大震災でのスカウトの活躍もあって、ボイスカウトの認知度が上がりこの運動に準拠した少年団が全国に広がって行きます。

鹿児島市でも1925(大正14)年に「魔城少年団」が発足します。鹿児島市長が団長となってボイスカウトの教育法による活動が展開されています。

この少年団は「学舎」に通えない子どもたちの受け皿として設立されました。

1945(昭和20)年の終戦を機に新たに組織化されたボイスカウト運動がスタートします。ボイスカウト運動の創始者ベーデン・パウエルが郷中教育を手本にボイスカウト教育法を創案したという事実はなく、あくまでも乃木希典に関連する記録を基にした推察の域を出ません。

乃木とベーデン・パウエルとの親交はその後も続き、ボイスカウト教育法を取り入れた乃木の思いは皇孫にも伝わります。



ハイド・パークにて左から2人目B.P.
右から2人目乃木大将



健児の社の教育は、古代希臘のスパルタに於ける便教育に類似し、武士道的精神を該教育の真髓として居るものであることは、おそらく世人の知悉して居るところであると思ふ。近年、歐米各國に於て風紀作振上甚だ有益なることと認められて居るところの「ボイスカウト」の操縦を故乃木大將が英京倫敦の郊外に於て參觀せられた際に、「實に結構な組織ではある、如何にして斯る良制度が工夫創始せられしものなるか」との大將の讃嘆に對して創始者たるベーデン・パウエル將軍は「閣下には御承知なきより「ボイ、スカウト」の模範は我健児の社が無供したこととなるのである。

健児の社教育の蔵書に及ぼせる影響を歴史上の事實に照して觀ても、幕末世論紛糾の際よく審議を統一して一致團結し、互に左提右携して、大義を執つて動かず、遂に維新の改革に當つて數多の質相名將を出したのも多く此健児の社即ち郷中制度の賜で、

鹿児島市史
Ⅱ

鹿城少年団
の設立

鹿城少年団は、大正十四年（一九二五）五月三日に、初めて編成された上野篤。健兒之社。ちなみに、ボーイスカウト（Boy Scouts）は、イギリスのパウエル将軍（Baden Powell）が、「一九〇八年に英國少年の心身を鍛錬する目的で創立した団体である。」^上我が国では、後藤新平が大正十一年（一九二二）に日本少年団の初代総裁に就任した。パウエル将軍は乃木希典将軍に対して、薩摩の健兒の社の制度、すなわち、郷中教育と学舎とを研究してその長所を採って、「これを組織した」と答えたと言ふ。^上鹿城少年団は、鹿児島市の少年で、毎日学舎に通えないもののために、「ボーイスカウトの形式を採用して、獨士的色彩ある健兒の社の精神を広く普及し、もつて鹿城少年の精神的修養」の機關として設立した。^上（成立趣意書）^上鹿城少年団は本部と健兒隊より成り、本部は鹿児島市役所に置き、団長一名（鹿児島市役員の外に、理事五名、監修員五名、副団長二名、班長二名、副班長二名、委嘱者二名、監修員外に、理事五名、監修員五名、副団長二名、班長二名、副班長二名、委嘱者二名）、各健兒隊は、隊長・副隊長・班長の役職を置いた。^上（団規則）^上この少年団は、「よし来た」^上（団規則）^上

第四編 教育

九八五

という標語で、実践を中心とした、各健兒は、自己の名誉にかけて、（一）皇室を尊び、神明を敬うこと、「人のため、世のため、國のため尽すこと。」（二）『忠・誠・勤・撫・守』の五項を誓った（同）。満一歳から満五歳までの少年が、入隊願を健兒隊に提出して、隊長の許可を受け、健兒となつた（同）。この少年団の訓練指導は、教育勅語の奉誦、薩摩古來の美風の継承と、これが実践とを根本方針として、各自の自宅訓練を重んじ、団体としては、日曜日・祝日に訓練を実施することが、その特色であった（鹿城少年団）。訓練要項は、細體・撫・教育勅語の暗誦などの精神修養基礎知識、止血法手当・患者運搬法・人工呼吸法・一般看護法などの衛生急救法、行軍・野営・通信法などの野外教練、その他、武術・角力・水泳などの多方面にわたつており、それらの知識技能の習得の程度に応じて、各級に進められる制度である（同）。

鹿児島市史



東宮御所でのキャンプ
ボーイスカウト日本連盟機関誌「スカウティング」
2019年5号より転用

時代は移りその時々の社会のニーズに対応したスカウト教育の展開が求められているなかスカウト運動が生まれた時代やこれまでの流れを振り返ることは、この運動の普遍的な目的を理解する上で必要なことと考えています。

鹿児島のボーイスカウト関係者は100年に及ぶスカウト運動と薩摩との縁を誇りに多くの先達の情熱や思いを受け継いで行かなければならないと思っています。

<参考・出典>

- ・ボーイスカウト日本連盟「日本ボーイスカウト運動史」
- ・元鹿児島大学名誉教授北川鉄三『薩摩の郷中教育』
- ・元鹿児島市長上野篤「健兒の社」
- ・鹿児島市編纂「鹿児島市史」

大正10年には皇太子裕仁親王殿下（昭和天皇）がベーデン・パウエルを引見されイギリスのスカウト運動の話を聞かれ大いに興味をもたれました。また、皇太子徳仁親王殿下（今上天皇）は国外でのご公務と重なる次期以外はほぼ毎回、日本スカウトジャンボリーにご台臨になり、スカウトと親しく交流され、1982（昭和57）年には東宮御所内でスカウトキャンプを実施されるなど、ボーイスカウト運動に深いご理解を示されています。昭和天皇のご学友であった、渡邊昭第7代総長やその息子の渡邊允侍従長など、鹿児島ゆかりの人々の存在も浮かび上がります。